©日本カムリ学会 2010
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 6(1):9-11

シェイクスピア劇に現れたウェールズ人

吉賀憲夫

Welshness in Shakespeare's Plays

Norio Yoshiga

Abstract: In his plays, Shakespeare created new stereotypical Welsh characters, Fluelen and Hugh Evans, who could not speak English fluently. For instance Pistol, an English solider, laughs at the Welsh captain Fluelen in *King Henry V* because of his poor English. Fluelen, however, does not object to the Englishman's scornful laugh, and shows his Welshness by forcing the soldier to eat the Welsh vegetable leek.

In *The Merry Wives of Windsor*, the Welsh Hugh Evans has no hesitation in saying "seese" for cheese and "putter" for butter and Falstaff desperately says, "'Seese' and 'putter'! have I lived to stand at the taunt of one that makes fritters of English? " Falstaff's strong desperation and resentment stem from the Englishmen's discontent at the rise of the Welsh in Elizabethan England. In Shakespeare's plays, the Welsh and their odd and strange English are positive proof of Welshness and serve to represent the vigor of the Welsh who began their new lives in England.

ウェールズのジェラルド（Giraldus Cambrensis: Gerald de Barry, c.1146-1223）は『ウェールズ素描』(*Descriptio Kambriae*)（1194 年）においてウェールズ人の長所として、勇気、明敏さ、倹約、歓待、音楽の才、言葉遊びの才能、話術の巧みさ等を挙げている。その長所の中でも音楽の才は特筆に値する。彼は「ウェールズ人は音楽のために集うと、伝統的なウェールズの歌を歌う。それも、他の所で行われているような斉唱ではなく、多くの旋法と転調のある合唱で歌うのである。この国ではごく普通のことだが、合唱では歌う人一人ひとりが異なったパート（音部）とヴォイス（声部）で歌う。しかし、最後には、全員が穏やかで美しい変ロ音（b フラット）のひとつの有機的な和声と諧調を醸し出して終わるのである」とその才能を称える。この合唱好きのウェールズ人というイメージは代表的な固定概念となり、２０世紀に至り、リチャード・ルーエリン(Richard Llewellyn, 1906-1983)の小説を映画化した『わが谷は緑なりき』(*How Green Was My Valley*)で確実に定着した。

１５世紀にイングランド宮廷で密かにささやかれたという小話に「天国から追い出されたウェールズ人」という話がある。その小話でウェールズ人が天国から追い出されることになる原因は、ウェールズ人が朝から晩まで歌う歌の「騒音」であり、ウェールズ人を追い出すときに「餌」として使われたのがウェールズ人の大好物チーズトースト（Welsh rabbit）であった。ここではウェールズ人の大好きな合唱とチーズトーストが天国からの追放と結びついているのだが、

それほどまでにウェールズ人の歌好きは有名になっていたものと思われる。ちなみに、この小話は宮廷に入り込み、幅を利かし始めただウェールズ人への揶揄であったという。

「タフィーは盗人」（Taffy was a Welshman, Taffy was a thief）という童謡（Nursery Rhymes）はイングランドにおける１８世紀から２０世紀にかけての反ウェールズ感情を代表するものだが、この盗みという行為もウェールズのジェラルドが指摘しているウェールズ人の短所、すなわち約束の破棄、盗み、略奪、どん欲なまでの土地所有欲等の中の一つに挙げられている。

バーナード・ショー（Bernard Shaw,1856-1950）の『ピグマリオン』(*Pygmalion*, 1913 年)はミュージカルや映画で「マイ・フェア・レディー」（*My Fair Lady*）となり有名になったが、これらの作品もウェールズ人と無関係ではない。ヒギンズは主人公イライザの父親ドゥーリトルの言葉を聞くや否や「生まれはハウンズロウ。母親はウェールズの産、だな」と彼がウェールズ系であることを見抜く。また彼はドゥーリトルの語り口を聴き「ピッカリング、この男は、修辞学の才能があるぞ。どうだい、自然で素朴な、この野性のリズムは！……このセンチメンタルなレトリック！ウェールズの血がながれている証拠だ。同時に、嘘つきで不正直なこともわかる。」（白水社、倉橋健訳）という。さすがにミュージカルや映画では「嘘つきで不正直なこともわかる」の部分は削除されたが、これらもウェールズのジェラルドの指摘するところのウェールズ人の欠点である。

このようにウェールズのジェラルドが指摘したウェールズ人の長所と欠点は後の文学作品等にも如実に表れているが、これはジェラルドの観察が鋭かったのか、それともジェラルドの著書により逆に一般化したものかは簡単には言えないが、次にシェイクスピアの作品に表れたウェールズ人を考察することにする。

シェイクスピア劇に登場するウェールズ人は、『リチャード二世』のウェールズ人隊長、『ヘンリー四世、第一部』のオーエン・グレンダワー（Owen Glendower）、そしてグレンダワーの娘（彼女には台詞はなく、父のグレンダワーが通訳する形をとる）、『ヘンリー五世』のフルーエリン大尉（Fluelen）、『ウィンザーの陽気な女房たち』の牧師ヒュー・エヴァンズ（Hugh Evans）である。

『リチャード二世』のウェールズ人隊長は、おそらくオワイン・グリンドール（Owain Glyn Dwr, 1345-1416）であろうと言われているが、『ヘンリー四世、第一部』のオーエン・グレンダワーとともに、予言や魔術に通じている。特にグレンダワーは「俺は地獄の底から悪霊を呼び出すこともできる」（『ヘンリー四世、第１部』３幕１場）と言っているように、「勇敢」で「神秘の秘法」にも通じた人物として、魔法使いマーリンの直系のような扱われ方である。これもウェールズのジェラルドの指摘に合致する。

シェイクスピアが作り出した新しいウェールズ人の特徴に、気質ではないが「英語が上手に話せないウェールズ人」というイメージがある。グレンダワーは「おれだってきみ（ホットスパー）に劣らずりっぱな英語を話せるのだ、／

©日本カムリ学会 2010
Bwletin Astudiaethau Cymreig Siapan 6(1):9-11

イングランドの宮廷で育ったおかげでな」(『ヘンリー四世、第一部』３幕１場)、と反駁できるのだが、『ヘンリー五世』のフルーエリンはこうはいかない。彼はイングランド人のピストルに、ウェールズ人であるが故に、また英語が上手に話せないために、いつもからかわれていた。ついには武勇に優れたフルーエリンは棍棒でピストルを打ちのめすのだが、打ちのめされたピストルにフルーエリンの友人ガワー大尉は「おまえがあの大尉をからかい、ひやかすのを、おれは一度ならず見かけたぞ。大尉がイギリス人のように英語をしゃべることができないので、イギリス人のように棍棒をふりまわすこともできないとでも思ったのだろう」（白水社、小田島訳）と叱責したのである。このフルーエリンはヘンリー五世をして「あのウェールズ人（フルーエリン）には／戦争に対する心構えと勇気があるようだ」と言わしめたように勇敢で武勇に優れたウェールズ人というイメージも兼ね備えている。

『ウィンザーの陽気な女房たち』の牧師ヒュー・エヴァンズはフォルスタッフから英語の破壊者と呼ばれるほどのひどい英語を話す。エヴァンズはチーズをシーズ、バターをパターと言って憚らない。「『シーズ』に『パター』だと！おれは英語を粉微塵にしてしまう輩のあざけりに耐えるために生きてきたのか？」(‘Seese’ and ‘putter’! have I lived to stand at the taunt of one that makes fritters of English?)（５幕５場）とフォルスタッフは嘆く。シェイクスピアに特徴的な「英語が上手く喋れないウェールズ人」は芝居という場では笑いの種となり、観客を笑わせる材料となっている。しかしフルーエリンもエヴァンズもそれが恥だとは決して思っていない。彼らは実に堂々として、イングランド人をやっつけているのである。このあたりに、シェイクスピアのウェールズ人に対する好意すら感じずにはおれないのである。